ラジオ放送

＜平成30年1月～3月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.422

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

●年頭放送 あなたのおかげで
金光教教務総長　西川良典　*page 1*

●信(まか)せる心
兵庫県・出石教会　大林誠　*page 6*

●神様はぼくらのヒットを待っている
東京都・麻布教会　松本信吉　*page 10*

●いのち、大切にしていますか（信心ライブ）　*page 14*

●小川さんの杖
京都府・墨染教会　松岡光一　*page 18*

●私の心に届いたもの（信心ライブ）　*page 22*

●ムラッチありがとう
大阪府・野田教会　丹羽晃　*page 27*

●甲子園を目指して
岡山県・西大寺教会　小林昭一　*page 31*

●まず、命がある（信心ライブ）　*page 35*

●幸せはどこから
徳島県・徳島西教会　筒井善子　*page 39*

●人を軽く見ないこと（信心ライブ）　*page 43*

●何事もまずお礼
静岡県・袋井教会　大場美子　*page 47*

●たった一言「おはようございます」（信心ライブ）　*page 51*

《年頭放送》

「あなたのおかげで」

金光教教務総長　西川良典

皆様、新年おめでとうございます。共々に平成三十年の新春を迎えさせて頂きましたこと、心よりお慶び申し上げます。

ことわざに「一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にあり」とあります。これは、「その日にやろうと思うことは朝に計画を立て、その年にやろうとすることは元旦に計画を立てるように、何事も初めに目標に向かって計画を立てることが大切である」という意味になろうかと思います。

新しい年を迎えて、改めて「今年こそは」と目標を立て、日々の営みの中に、願いを新たに取り組みを始めることは、心引き締まる思いが致す、大切なことだと思います。

しかし、忘れてはいけないことがあります。それは、何に取り組むにしても、全ては、普段の生活の上に成り立っているということであります。食事を取るにしても、仕事をするにしても、全て他の人の助けがあるから出来るのです。そのことに気付くことで、「ありがたい」という心が生まれてくるのです。

人は誰もが、健康でお金があって、物に恵まれた生活をしたいと願うわけでありますが、そうであればあるほど、そうしたものに対するお仕えの仕方を間違えないようにさせて頂かなければなりません。

例えば、私たちの体の場合ですと、自分の欲望を満たすために、好きなだけ食べ、好きなだけ飲んでしまうという、「我食(がぐ)い」「我飲(がの)み」をしています。体の痛みや苦しみなど、考えたことがあるでしょうか。よくよく考えてみますと、神様が健康な体をお与え下さっているのに、自分の体、自分の力、自分の甲斐性のように思って、散々な目に遭わせてきた自分であった、ということが分かってきます。これは体ばかりではございません。商売をさせて頂く場合でも同じであります。

先日、住宅販売会社にお勤めになっている人が教会に参ってこられました。その人は、最近、家が売れなくて、困っておられ、「今日(こんにち)の販売不振は景気の問題ともからんでおり、なかなか家が売れません。そこで、何とかおかげを頂きたいのです」と言われましたので、私はその人に申し上げました。

「あなたは家を売りたいと思っておられるのでしょうが、建て売りの新しい家であろうが、今あなたが住んでいる古い家であろうが、同じ家である以上、言わば親戚のようなものでありますから、まず、今、あなたが住んでいる家にお礼を申して下さい。家を形作っている材木は、天地の中で何十年も掛かって育てられて大きくなったものです。そして、家の用材として切られ、切り刻まれて、家になっているのです。その間、どんなに辛抱をして下さったことであろうかと、それらの木の身になって、家の身になって、今日まで住まわせてもらっている家にお

礼を申し上げて下さい。もし、あなたが家へのお礼が出来ていないのであれば、『これまでお粗末ご無礼を重ねておりますが、お許し下さいませ』と言って、家に対して真剣におわびを言って下さい。そして、その上で、『どうぞ、分譲地のそれぞれの家に、ご都合の良い方をお差し向け下さいませ』と一心にお願いして下さい。そうすれば、天地の親神様はあなたの姿をご覧になって、必ず家を買って下さる方を差し向けて下さいます」と、このように、家の販売をさせて頂く心構えを申し上げました。

家の販売というのは、なかなか契約が成り立たないと言われておりましたが、ありがたいことに、その方は、それから二カ月経ってから、二件の契約が取れるというおかげを受けられました。真心をもって、家の身になってお礼を申し上げ、お願いしていくことがいかに大切であるか、実証されたように思います。そういうことをとんと抜きにして、商売の繁盛のみをお願いしても、物は売れるはずがありません。それは、天地の理にかなった生き方になっていないからです。

お世話になる物にお礼を申すことは、商売だけに限りません。朝、目が覚めてからのことを考えてみましても、お水にお世話になり、食べ物にお世話になり、あるいはトイレにお世話になっています。それらの物に、果たして、「あなたのおかげで」と、お世話になる物の身になって、お礼を言ったことがあるでしょうか。

神様は私たちのために、どんなお気持ちでそれらの物をおつくり下さったことであろうか。そのように考えてみますと、神様だからこそ、ようもようもお許し下さって、私たちを生かして下さっているのだ、本当に申し訳ない、相済まない、何というご恩知らずの自分であったかということが、ひしひしと心に響いてきます。

お世話になる全ての物に対して、その物の身になって、ありがとうございました、と心からお礼を申し上げる。そういう生き方になりましたら、この天地の中で立ち行かないはずはありません。

日々の生活は、全て親神様の懐の中で、神様のお恵みを頂いてのことであります。ですから、こちらが、物をいとおしむ心や、お礼を言う心などをしっかり持たせて頂いて、生活を刻んでおりましたら、五年十年向こうには必ず、「思ってもみなかったこんなおかげを頂きました」ということになってくるわけです。今日(こんにち)ただ今の中に、そのようなおかげの芽が潜んでいるわけでありますから、その芽が育つように、神様に心を向けた生活を大切にしていきたいものと念願しております。

どうぞ、皆様にとりまして、今年が良い年になりますように、お祈り申し上げます。

《先生のおはなし》

「信(まか)せる心」

兵庫県・出石教会　大林誠

先日、京都の古い町家を見学する機会がありました。通りに面した間口の狭い家に入り、奥まで続く細い土間を進んで行くと、古風な調度品も、明かり取りの中庭も、いかにも京都らしい味わいを醸し出していました。

しかしよく見ると、家の骨組みは至ってシンプルで、床下を覗き込むと、柱の足元は石の上にちょんと乗っているだけ。建物を頑丈にするはずの壁も両サイド以外にはほとんどありません。

こんな建物、見掛けは風情があっていいけれど、ちょっと大きな地震が来たらひとたまりもないだろうな、と思いました。

ところが、案内してくれた人は、「弱そうに見えるでしょう。でも、これがいいんです。これでこそ地震に耐えられるんですよ」と言うのです。

京町家は、固さや強さで揺れをはねつけるのではない。揺れのエネルギーをしなやかに受け止めて、上手に逃がす。そんな発想で造られているのだという説明でした。

なるほど、力まないのがいいのか。そう納得した時、私はふと、一昨年亡くなった父のことを思い出していました。

父は晩年、急に物忘れがひどくなり、病院で検査を受けてもらいました。

「脳が小さくなっていますね。これは治せませんが、進むスピードを遅らせることは出来ますから、薬を飲みましょう」

お医者さんの説明に、父は興味深そうに耳を傾けていました。

私は父がショックを受けないかと心配していましたが、そんな様子は少しも見られません。それどころか、家に帰ってから、会う人会う人に、自慢話でもするかのように報告するのです。

「ＣＴ写真を初めて撮ってもらいましたが、何と私の頭にも脳みそが入っておったんですなあ。『初めまして、お世話になっております』とお礼を申しました」

「いったい何事ですか」と聞く人に、「いやあ、病院で認知症のテストを受けてきましてね、そしたら見事に合格しまして、認知症老人のお墨付きを頂きました。これも、神様から長いこと命を頂いてきた証です。ありがたいことです」。それを聞いた人は、「合格おめでとうございます」と言うわけにもいかず、返答に困っておられる様子でした。

父はそのように、何事も明るく受け止める人でしたが、その人生は、決して順風満帆だったわけではありません。

戦災で家を失い、栄養失調と肺結核で進学を諦め、結婚してからも経済上の苦労は絶えず、体を酷使して腰を傷めるなど、苦労の絶えない一生であったとも言えます。

しかしそうした体験を、信心を支えにして一つ一つ乗り越えていくうち、人はみな、常に神

様の温かい愛情に包まれて生きているのだと、心の底から確信するに至ったのでしょう。

そんな父にとっては、認知症という新しい体験をさせて頂けるのも神様のおかげ。また、病院でお世話になるのも、薬を頂くのも、皆さんが心配して下さるのも、全ておかげなのです。そしてこれらの一連のことが、次のどんなありがたいことにつながっていくだろうかと、希望をもって見つめているのです。

認知症が進むにつれて、パーキンソン病の症状も出て、歩くことが難しくなっていきました。それでも、父の口から愚痴や不足めいた言葉は、一言も聞かれませんでした。

ある時、私と妻とで両脇をかかえて、診察を受けに行ったことがありました。

「何か痛い所とか、つらいことなどはありませんか」と問い掛けるお医者さんに、父はしばらく考え込んだ後、「みんなが寄ってたかって、世話を焼いてくれまして、私ほど幸せな者が他にあろうかと思っとります」と言うのです。

たった今、足腰の痛さに堪えながら、やっとの思いで椅子に座ったばかりなのに、もう頭の中は、一切のつらいことを覆い尽くしてしまうほど、ありがたいことばかりなのでした。

それからしだいに言葉が失われ、べったり床につくようになって、やがて静かに息を引き取りましたが、意識があるうちは、家族の顔を見るたびに、何かモゴモゴと口を動かしてはクスッと笑っていました。どうやら冗談を言ってみんなを笑わせているつもりのようでした。

何の憂いも迷いもなく、生き死にを神様に任せ切ったその姿は、神様の慈しみに包まれている安心を、身をもって教えてくれているようでした。

人間は、生きていく上で様々な問題にぶつかります。それらは、努力によって解決出来ることばかりではありません。重い病気、災害、事故など、自分の力の及ばない圧倒的な力でねじ伏せられるようなこともあるでしょう。そんな時にさえ、何が何でも自分の力で立ち向かわなければと身を硬くして構えていたら、心までポキッと折れてしまうかもしれません。

京都の古い町家が、地震の力をしなやかに受け止めてやり過ごすように、人間も、力を抜くべき時には抜くというワザを、日頃から身に付けておく必要があるのではないでしょうか。

父が生前、よく言っていました。

「信心の『信』は『まかす』とも読む。だから、信心というのは、神様にお任せする心ということ。しかしこの、お任せするというのが、なかなか難しゅうてなあ」

「難しゅうてなあ」という言葉から、父が常々、心の稽古をしていたことがうかがえます。

父が私に命懸けで見せてくれた信心、信(まか)せる心を、しっかりと受け継いでいかねばと思っています。

《先生のおはなし》

「神様はぼくらのヒットを待っている」

東京都・麻布教会　松本信吉

金光教には「わが子のかわいさを知って、神が人間をお守りくださることを悟れよ」という教えがあります。

おはようございます。東京・恵比寿にあります金光教麻布教会の松本信吉、五十歳です。

さて、私には二人の子どもがいます。中三の女の子と、小五の男の子です。小五の男の子は今、少年野球に夢中です。

実は、この子は、一歳十カ月の時に大やけどをして、一カ月の間、入院をしたことがありました。台所で妻が来客用のコーヒーを煎れていました。カウンターの上にはポットに熱々のコーヒーが満たんに出来上がっていました。

妻がちょっとその場を離れた隙に、まだヨチヨチ歩きの息子が、トコトコとカウンターの近くへ。下から見上げるとポットの取っ手が見えます。息子はジャンプして取っ手に手を掛け、ひっくり返りました。ガチャンという音の後、「ギャー」という叫び声。息子は頭からかぶるように熱いコーヒーを浴びたのです。

幸い、頭や顔は少しかかった程度で済んだのですが、左肩から腕にかけて、熱湯で赤く膨れ上がっています。すぐに患部を流水で冷やしましたが、柔肌は剥け、肉が見えました。お祈りをしながら、近くの病院に連れて行きましたが、

かなりの重傷で、即入院となりました。
お医者様はすぐに適切な治療をして下さいましたが、今でも、肩や腕にやけどの跡があります。幼稚園や小学校に上がる時にいじめられないか、薬の副作用がないかと心配もしましたが、その後も明るく元気に育ち、友達もたくさん出来ました。今こうして野球を楽しめることをありがたく思います。
昨年からは、小学校のクラスメイトらと共に、地元のクラブチームに入部し、土日はグラウンドで練習や試合に汗を流しています。
息子は、走塁は得意なのですが、打つのが下手くそで、なかなかヒットが打てません。監督から、「お前は足は速いんだから、バットに当てて転がせばいいんだ」と言われてもバットにボールが当たらない。毎日、素振りを繰り返し、バッティングセンターにも通いました。監督も息子を「八番センター」で辛抱強く使ってくれました。
春のリーグ戦の初戦。息子は二塁三塁に走者がいるチャンスに打席に立ち、必死にバットをボールに当てにいきましたが、空振り三振。結局、得点にはなりませんでした。
その後も、息子は監督のサインはしっかり見るので、フォアボールで塁に出て、得点につながることは何度かありました。しかし、ヒットが出ない。
次の打席、三塁前のぼてぼての当たりでした。それでも必死に走り、間一髪、足が勝って内野安打になりました。ぼてぼての当たりとは言え、

ヒットはヒット。息子の待望の初ヒットです。親としては、とてもうれしく思いました。

翌週、日曜日の試合、第二打席で息子は二塁打を打ちました。左中間をライナーで破る見事な二塁打でした。その時の息子の笑顔は忘れることが出来ません。

チームではレギュラーの子も補欠の子もみんな頑張っていて、そのお父さんやお母さんたちも一生懸命支えます。親御さんたちと、時々、親睦会を開きますが、先日も、六年生がリーグ戦敗退後、チームを引退する時の泣きながらのあいさつはとても感動的でした。

それぞれ子育ての課題や悩みも抱えているのですが、励まし合ったり、慰め合ったりする時間はとてもありがたく、特に試合に勝った後のお酒はおいしいものです。

「子どものことなのに、親が喜んでどうするの？」という声も聞こえてきそうですが、子どもの喜びは親の喜びなんだとつくづく思います。

やけどをした時は、こんな日が来るとは思ってもみませんでしたが、一日、一月（ひとつき）、一年と、成長を重ねる中で、体も大きくなり、やけどの跡も少しずつ薄くなっていきました。

ヒットを打とうが打つまいが、息子が元気に打席に立ってくれる、その姿を見るだけで私はうれしいわけです。ましてや、努力が実ってヒットを打てた息子の笑顔、満面の笑みを見られた私はなおうれしい。私は、もしかしたら神様もこんな気持ちなんじゃないかと思いました。

いつも私たちのことを見守り、応援してくれている神様。そして、私たちと一緒になって喜んでくれる神様。神様は、私たちが喜ぶ姿を心待ちにしてくれている、そんなふうに思ったのです。

時代社会は変わっても、親子の関係は変わりません。親が子どもの幸せをずっと願い続けるように、神様も私たち人間の幸せを願い続けています。そんな神様の思いを、私は今、現代社会に、多くの人々に、伝えていきたいと思っています。

試合の日の夜、一緒に風呂につかりながら、息子は夢を語りました。「来年は二番セカンドになりたい。チームメイトとクラブを盛り上げ、試合に勝って、監督を喜ばせてあげたい」と、息子の目は輝いていました。

今、ラジオを聞いて下さっている皆さん。神様は、私たちが人生という名の野球場でヒットを打つことを心待ちにしています。

さあ、今日一日、あなたも神様も喜ぶ日になりますように。HAVE A NICE DAY!!

《信心ライブ》

「いのち、大切にしていますか」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、金光教静岡教会長の岩﨑道與（みちよ）さんが平成二十四年十二月二十一日に静岡教会でお話されたものをお聞き頂きます。

先日あるご信者さんが、このお広前に初めてお参りをするという身内の方を連れて参拝をされました。

その信者さんのご兄弟が今度大きな手術を受けるということで、それを心配したそのご家族、子どもさんを連れてのお参りでありました。手術の様子、病気の様子やどういう手術かということを聞かせてもらいまして。神様に手術の成功を一緒にご祈念させてもらう前に、お話をしばらく聞いて頂きました。

その初めてお参りした人にとっては、自分の親のいのちを守ってもらいたい、助けてもらいたいというお願いであります。私は、「神様にいのちを助けて頂きたいと願う以上、あなた自身は、いのちを大切にしていますか？」と聞かせてもらいました。

子どもがですね。おもちゃを粗末にして、散々乱暴に扱っておもちゃが壊れた。「さあ壊れたからお母さん直して」って言っても、親としてみれば、「それは、あんたが、普段粗末に扱

っているからでしょう」って、親だったらそう言うでしょう。

「あなたの親がいのちを乱暴にしたとか、粗末にしたという、そういうことは言いませんけれども、ただ、その親のいのちの助かりを願うあなたとして、あなたは、いのちを大切にしてきましたか。自分のいのちを粗末にしておいて親のいのちを神様に助けて下さいとお願いする。それで果たして神様に通るかどうか、そう思うんです」とまあこういう話をしました。

どうです、「いのち、大切にしてきましたか？」。いきなりそう言われても分かりませんよね。

いのちを大切にするってどういうことか分かりますか。いのちを大切にするというのは、その私たちのいのちは、神様から頂いたいのち。そしてそのいのちは、神様にお守りお導き頂いているいのち。神様のお恵みによって生かされているいのち。じゃあそのいのちを大切にするというのは、神様のお恵みやみ働きや神様の思いを大切にするということに他ならない。

じゃああなたは、いのちにお礼をしたことがあるか。そのいのちを育む食べ物にお礼をしたことがあるか。そのいのちを調える大小便にお礼をしたことがあるか。息の抜き差し、体の一つひとつにお礼をしたことがありますか？　それがいのちを大切にするということですが、どうです？

で、「これから親が大きな手術を受けるについてまだ二、三日ある。だったら、ぜひまずあ

なたが、今日ここで、親のいのちを助けて下さいと願ったそのあなたが、まずはこの手術までの二日間、三日間、あなた自身がいのちを大事にして下さい。そして、あなたの親のいのちも大事にして下さい。自分が朝、目が覚めたら、『ああ、目が覚めた』と言って神様にお礼を言い、親が朝、目が覚めたら、『ああ、ありがとうございます』と親に代わってお礼を言い、食事を取ったら、『ありがとうございます』。親が一口でも食事が病室で頂けたら、『ありがとうございます』。そうやっていのちへのお礼をしていって、手術の日を迎えさせて頂きましょう。これなら出来そうですか？」

「出来ます」

で、そういえばということで、その一緒にお参りをしたご信者さんがですね、小さい頃に、親から教わった食前訓は今でも覚えているそうです。

「食物はみな人のいのちのために天地の神の造り与えたまうものぞ。何を飲むにも食べるにも、ありがたくいただく心を忘れなよ」

正にその食前訓がいのちへのお礼ですよね。天地の神の造り与えたものを何を食うにも飲むにもありがたく頂く、その心を大事にさせてもらう。それすなわち、神様のお恵みを大切にすることであり、いのちを大切にすることなんです。そうであるのならば、その食前訓の最後にある「忘れなよ」ここが大事なんです。忘れなよ。忘れてはならないよっていう。

でも、私たちはついつい忘れてしまう。どう

しても忘れてしまう。忘れないためにどうしたらいいかっていったら、手を合わせるんです。食事の時、手を合わせる。

「じゃあ忘れないために、いのちを大切にするということを忘れないために、手を合わせることをそれに付け加えて下さい。天地のお働き、神様のみ働き、み恵みを忘れてしまう私たちだからこそ、忘れないために、いのちを大切にするために、手を合わせることを大事にさせてもらいましょう。これから二日間、三日間、ぜひそのことに取り組んでみて下さい」という、まあこういうお話をさせて頂きました。

「身近な人が病気になる。難しい手術をする」ということになると心配になり、さらに親しい間柄であればなおさら、出来るものなら代わってあげたいと思う気持ちになることがあるかもしれません。

そのつらさを代わってあげることは出来なくとも、代わりに、「いのちへお礼をする」、「忘れないように手を合わせる」というお話を聞き、その方は、一生懸命取り組みました。そして、手術は無事成功し、回復も順調だそうです。

私も、試しに手を合わせてみました。いのちのお礼をしてみました。心が、ほ～っと温かくなるような気がします。心に希望の火が灯ったのでしょうか。

《先生のおはなし》

「小川さんの杖」

京都府・墨染教会　松岡光一

私の奉仕する教会に長年参拝されている小川好子さん。今年八十三歳になられました。バスと電車を乗り継いで、教会へお参りされています。

いつも明るく、穏やかで、少し控えめな方ですが、熱心に参拝され、一心に神様に心を向けておられる姿からは、芯の強さが感じられます。そんな小川さんから、信仰に生きることの力強さと確かさを教えてもらったことがあります。

それは今から数年前のことです。当時、体操教室に通っておられた小川さんが、その帰り道、自転車で坂道を下っておられました。車の通る車道から歩道に入ろうとした時です。ちょっとした段差にタイヤが滑り、バシャーンと倒れてしまったのです。出血はしていなかったものの、足に力が入らず起き上がることが出来ません。

どうしたものかと困っているところに、「あら、小川さんのおばちゃんじゃないの」と声を掛けて下さる方がありました。以前住んでいた町内の知り合いの奥さんでした。偶然通り掛かったその方が、慌てて救急車を呼んで下さり、すぐに病院へ搬送されました。

診察の結果、左ひざを複雑骨折していて、ギプスで固めてもらい、一週間ほど待ってから、足に金具を入れる手術をし、ひざから下を二十一針も縫うことになりました。

応急処置が終わってすぐ、入院先の病院から、電話を掛けてこられたのですが、その時の小川さんの言葉に、私は大変驚いたのです。

「実は、こういういきさつでけがをしました。でも、頭を打っていたら大変でしたけれど、頭は打たずに、足のけがだけで済んで良かったです。それに、倒れたのが歩道側でしたから、これまた良かったんです。車道の方でしたら、車も通っていますし、危ないところでした。その上、偶然、知り合いの人が居合わせて下さって、『小川さん、大丈夫？』って駆け寄って来て、救急車を呼んで下さったから本当に助かりました。神様がその方を差し向けて下さったんだと思います。それに救急車で病院に運ばれる時も、自宅に一番近い病院がちょうど空いていて、そこに運んでもらうことができました。家族が来るにも都合がいいし、ちょうど嫁が仕事に通う途中にある病院で、本当にありがたかったです」と、こんなふうにおっしゃったのです。

足に金具を入れるような手術を控え、この先、元のように歩けるかどうかも分からない、そんな不安な状態の時に、「ありがたいです、ありがたいです」と、明るい声で話して下さったのです。

小川さんの手術は無事成功し、その後、リハビリ専門の病院に移って、数カ月間、リハビリに取り組まれました。退院後、教会にお参りに来られ、入院中のことを話して下さいましたが、その話を聞いて、またまた驚きました。

ある時、一人の認知症のおばあさんが、同じ

部屋に入院してこられました。

付き添いの娘さんが、童謡などの歌の本を置いて帰られたのを見て、小川さんは、「このおばあさんは、きっと歌がお好きなんだろう」と思い、おばあさんと一緒に「赤とんぼ」などの童謡を歌ったのです。

すると四人部屋の他の人たちも一緒に歌って下さるようになって、看護師さんたちも、「この部屋はすごいなあ。みんなで明るく歌を歌ってるなんて、こんな病室はないですよ」と驚かれたというのです。

またある時は、隣のベッドに九十六歳になる耳の遠いおばあさんが入ってこられました。看護師さんがいろいろ説明をされるのですが、どうも聞こえていない様子でしたから、小川さんが一緒に聞いて、後からおばあさんに、「この薬はこうですよ、これはこうするんですよ」と教えてあげていたというのです。

入院中の出来事を振り返りながら、小川さんは、「おばあさんも、看護師さんも、『あなたが居てくれるから助かるわ』と喜んで下さいました。けがをして入院している私が、人様のお役に立てて、本当にありがたかったです」とうれしそうに話して下さったのです。

そして退院後、一年ほど経った頃のことです。小川さんは、けが以来、杖をつくようになり、その日も杖をついてお参りされました。帰り際、車で来ていた方が、近くの駅まで送って下さいましたが、駅に着いて、教会に杖を忘れたことに気付いたのです。

運転していた方が、「取りに戻りましょう」と言って下さいましたが、小川さんは、「他の所に忘れたのなら心配ですが、教会に忘れたということは、神様が、『もう杖を置いていけ』とおっしゃったんだと思いますから」と言って、杖を持たずに帰られたのです。

後日、お参りに来られ、「あれからずっと杖を持たずに歩いています。外を歩く時には、『金光様、金光様』と心の中で唱え、一歩一歩神様にお願いしながら歩かせてもらっています。かえって慎重に歩きますし、差し障りありません。ありがたいです」とおっしゃったのです。

つらいことや苦しいことに出遭ったり、不安や心配事が膨らんだりした時に、そこをどう受け止め、乗り越えていくのか。そして、どんな生き方をしていくのか。小川さんの姿に、信仰に基づく生き方の力強さ、確かさを感じます。

信仰の力とは、何か特別な不思議な力を身に付けることではなく、どんな時にも我が身を支えて下さっている働きのあることをありがたく受け止め、そしてその喜びをもって、人様のお役に立つ生き方を進めようとするところにあるのではないでしょうか。

小川さんの姿を見ながらそう強く感じるのです。

《信心ライブ》

「私の心に届いたもの」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、鳥取県金光教石脇教会の教師、福場信枝さんが、平成二十七年七月四日、信奉者向けの集会でお話しされたものをお聞き頂きます。

私が小学校三年生の時ですから、もう随分と昔の話です。

私は学校に行かなくなりました。今で言いますと「不登校」です。母は悩み、随分つらい思いをしたようです。

ある日、母はどうしようもない気持ちになって、一人でご本部に参拝しました。お結界には四代金光様がお座りになられておりまして、母は、娘の私が、学校に行かないことをお届けしたそうです。すると、金光様は優しいお顔で、「この子がハイハイした時、うれしかったじゃろうが。この子が歩き出した時、喜んだじゃろうが。その時のうれしかった気持ちを思い出してな」と、お話し下さったそうです。母は何とも言えないすっきりした気持ちで家に帰ったということでした。

すると次の日、母は何にも言わないのに、あんなに行かないと言っていた娘の私が、朝すっと学校に行ったのです。母はとても驚き、神様

にお礼を申したということです。

実はですね、この話、母が私のことでですね、一人で金光様にお届けに行ったということを、数年前に初めて知りました。

というのも、私がご用させて頂いております教務センターでは年に一回、青年を対象にしたセミナー、勉強会みたいなものを開催してるんですが、「四代金光様のご生涯を通して、教祖様の信心を知る」というような内容でした。それを企画する段階の時に、ふと母に、「お母さん、四代金光様のことで何か思い出に残っていること、印象に残っていることはないか」というふうに尋ねたんですね。するとこの話をしてくれたんです。

もう私はびっくりしてしまいました。といいますのも、私はその時、小学校三年生ですから、その時のこと、その日の朝のことをはっきりと覚えているんですが、その日、あの朝、なぜだか分からないんですが、「今日から学校に行こう」と思ったんですね。

で、この話を聞くまで、あの時私は、自分の意思で学校に行こうという気持ちになったというふうに、ずっと思っていたんです。それがそうではなかったわけですね。神様、金光様、両親の祈りの中で、私は学校に行こうという気持ちにならせてもらったんです。四十年近く経って初めて知りました。

もちろんですね、学校に行こうという気持ちになることだけがいいというわけではないんですが、私はその時そういう気持ちにならせて頂

きました。

普通に考えればですね、母がですね、金光様のお取次を頂いて、子どもがハイハイした時のこと、歩き出した時のことを思い出したことと、私が学校に行こうと思ったことって何のつながりもないし、何の関係もないんですが、やっぱりそこが、信心、お取次のすごいところなんですね。

み教えに、「願う心は神に届くものである。天地金乃神は、くもが糸を世界中に張ったのと同じことである。糸にとんぼがかかればびりびりと動いて、くもが出て来る。神も同じことで、空気の中にずっと神の道がついているから、どれほど離れていても、拝めばそれが神に届く」と、あります。

母の思いが、願いが神様に届いて、そして私の心に届くんですね。私たちは自分の心と言いながら、自分の心をどうしようも出来ないんです。でも実際この時、当事者は私なんですが、私の知らない所で神様の祈りと周りの人たちの祈りが相まって、私の心に働いて下さったんです。私の中の神心に働いて下さったんだと思います。

祈るということはですね、素晴らしい働きになっていくということを初めて知りました。そしてまた祈られているということが、何とありがたくて幸せなことかというふうに思いました。

さてこの時ですね、四代金光様は、「この子がハイハイした時、うれしかったじゃろうが。

この子が歩き出した時、喜んだじゃろうが。その時のうれしかった気持ちを思い出してな」と、ご理解下さっています。

これはどういうことかと言うと、母は、不登校である娘の今の姿ばかりに目がいって、神様のおかげで生まれてきた娘のいのちのお礼を申すことが出来ないんです。もうつらいばっかりです。

ならば、うれしい思いをした時のことを思い出してごらんということです。うれしい思いをした時のことを思い出してみると、あの時ハイハイ出来たのも神様のおかげだったなあ、歩き出したのも神様のおかげだったなあ、ということを再確認することが出来る。そこからでもいいから喜んで、お礼を申す生き方をさせて頂きましょうということです。

幼い頃の出来事、四十年の時を経て、そこにはお母さんの温かい祈りがあり、祈ることの素晴らしい働きや、祈られていることのありがたさ、幸せを知った、その感動がとても強く伝わってきます。

お母さんの祈りが神様の祈りと一つになって福場さんの心に届き、前へ進もうという気持ちになれたのでした。

そして、お母さんの祈りの力となり、助かりの元になったのは、喜ぶ心なんですね。

喜ぶ心は、自分自身にも周りの人にも生きる力を与えてくれます。喜ぶ心で、喜びあふれる毎日を過ごしていきたいですね。

《先生のおはなし》

「ムラッチありがとう」

大阪府・野田教会　丹羽晃

私が、中学二年生の時、夏の林間学校での話です。旅館に着いてすぐ休憩時間になりました。夕食まで三時間あり、仲の良い友達五人で、旅館の下に見える川を見て、「あの川に入って上流まで行こう」と誰かが言いました。

ワクワクドキドキが大好きな私たちは、サンダルに体操服、短パンと動きやすい服装で出掛けました。川に入ると、ひざぐらいの水の量でした。

途中、岩から岩へ飛び移ろうとして、こけてびしょぬれになる友達もいて、大笑いしながら進みました。一時間ほど水の中を歩くと、行き止まりになり、これ以上、上流には進めないと分かり、「これからどうする？」と考えていると、一人の友達が、「この崖を登って道路に出よう。そしたら、道路を歩いて旅館まで帰れるから」と言いました。

すぐにみんな、「面白そうやな」と言って挑戦することになりました。崖の高さは十メートルぐらいでした。

まず、十メートルの崖を、縦一列で登りましたが、顔に土が落ちてくるので諦め、次に横一列で登ることにしました。ロッククライミングの要領で登るのですが、もちろん、命綱はありません。誰が一番速く登れるか勝負することにしましたが、私の登った場所は凹凸がなく苦戦

しました。途中、指を掛ける所がなく、草を引っ張ると、抜けて落ちそうになったり、指が岩に引っ掛からずに、二十センチずり落ちたりと大変でした。

先に登り着いたみんなが応援してくれる中、何とか、あと五十センチで着くという所で、ムラッチという友達が崖の上から、「俺の手につかまれ！」と言って右手を差し出してくれました。ムラッチが天使に見えた瞬間でした。

ガッチリと右手をつかみながら、「ムラッチ、僕たちは一生友達だ」。そう思った瞬間、何と、岩をつかんだ私の左手と両足が、油断からか、岩から外れたのでした。当時、五十キロぐらいあった私の体は、ムラッチの右腕一本でぶら下がる形になり、下を見て、「ここから落ちたら死んでしまう」と、死の恐怖を感じ、絶望的な気持ちになりました。

すると、さっきは天使だったはずのムラッチが、な、なんと…、「痛い～、手～ちぎれる～、手～離せ～」と、天使から悪魔に変身したかのような信じられない一言を言いました。恐怖で体がすくんでいた私は、その声を聞き、「コイツだけは許さん～」という怒りの気持ちが、メラメラと燃え上がりました。

すると、偶然にも両足と左手が岩に掛かり、自力で何とか、上まで登ることが出来ましたが、ヘトヘトで地面に大の字になって倒れ込み、立つことが出来ませんでした。その後、ムラッチへの怒りがフツフツと湧いてきて、「何が手～離せや。手を離したら死んでしまうやないか！」

と怒って言うと、「何がやねん、俺が助けたったんやないか！」と言い返してきたので腹が立ち、つかみ合いのけんかになりかけました。周りの友達に止められ、引き離されましたが、私の怒りは収まりませんでした。

その後も、ずっと心の中がモヤモヤしていました。そこから学校生活でも、ムラッチとは距離が出来、中学三年で別々のクラスになり、卒業しました。卒業後、会うことはなかったのですが、心の中にずっと「友達に裏切られた最悪な思い出」として残っていました。

私は二十五歳で結婚をして、子どもを二人授かりました。

今から十年前、長男が小学五年生の時でした。一緒にお風呂に入っている時に、ふとその話をしました。すると長男は、「ある意味、ムラッチはお父さんの命の恩人やな」と言いました。

私は一瞬、「えっ、命の恩人？　どこが？」と思いましたが、冷静に考えてみると、確かにあの時ムラッチの、「手～離せ～」という一言が無ければ、私はもちろんのこと、ムラッチも共に崖から転落したかもしれないのでした。あの一言があったおかげで、私の心に、怒りの気持ちではあったのですが、大きな力が湧いたのは事実です。その結果、手と足が岩に掛かって、助かったのです。

言葉の良し悪しはともかく、あの声で助かったのですから、命の恩人には違いありません。本当は腹を立てる相手ではなく、感謝しなければいけない相手だったのです。そのことを長男

から教えてもらいました。子どもの素直な言葉は、私の心にストレートに突き刺さり、ハッとさせられたのでした。

今まで腹が立って曇っていた私の心の鏡が、曇りを取ってもらったようにスッキリとして、物事がよく見えるようになりました。今となっては、中二の夏、神様がムラッチを通して、あの言葉を通して、私を助けようとしてくれたのかと思うことが出来、ムラッチと神様に感謝出来るようになりました。

そして、神様はいつまでも過去の出来事に苦しむ私を、長男の言葉を通して助けてくれたのでした。神様の働きはすぐに分かることもあれば、時間を経て初めて分かることもあります。言葉や事柄を通して、私たちに気付きを与えて下さっています。

つらいことや苦しいことに出遭うと、つい悪い面から見てしまいがちですが、その中に幸せの種が隠されているのかもしれません。

長年、勘違いしていた「友達に裏切られた最悪な思い出」から「友達に救われた最高の思い出」として、私を救ってくれた長男と神様に本当に感謝しています。そして、今、心から言いたいです。「ムラッチありがとう！」

《先生のおはなし》

「甲子園を目指して」

岡山県・西大寺教会　小林昭一

金光教の本部がある岡山県浅口市に、金光教の教えを基につくられた「金光学園」という学校があります。

「人を大切に、自分を大切に、物を大切に」を合い言葉に、中高一貫での教育が進められています。私は二年前までその金光学園で高校野球部の監督を務めていました。

幼い頃から野球が大好きだった私は、甲子園を目指して地元の強豪校に進み、幸運にもその夢を叶えることができました。その後、大学、社会人と野球を続け、現役を引退した後は指導者の道に進みたいと考えました。金光教の教会の長男として生まれた私は、金光学園の野球部が練習環境に恵まれずに、甲子園にも出たことがないことを知っていましたので、自分の力で甲子園に連れていくという夢を描いたのです。そして、念願叶って金光学園で野球部の指導をすることになりました。

高校のコーチを一年間経験し、強豪校との力の差を感じた私は、中学校の監督になることを願い出ました。中高一貫の利点を生かし、中学から育て、続けて高校まで指導をすれば、強豪校とも戦えると考えたのです。狙いどおりに中学の県大会で優勝し、そのメンバーの高校進学に合わせて、私も高校の監督に就きました。

当時の指導法を一言で言えば、「俺について

こい」。自ら先頭に立って声を張り上げ、厳しい練習で勝利を目指しました。

二年後、中高六年鍛えた選手達が高校三年生となって迎えた夏の県大会では、優勝候補に挙げられていましたが、残念ながらベスト4で夢は破れました。翌年、翌々年も県の上位に顔を出すものの、甲子園には届きません。

周りの期待が高まる中、私は次第に心が塞ぐようになりました。この先また中学生から指導する気持ちにはなれず、高校から特別な選手が入学することも望めず、甲子園への道筋を描くことができなくなったのです。

自分の力に頼った指導に行き詰まり、悶々と過ごしていた時、ある先生からのアドバイスを受け、毎朝、金光教の本部へお参りするようになりました。

まさに苦しい時の神頼みでしたが、当時はそうせずにいられない心境でした。甲子園出場というおかげを求めての参拝でしたが、毎朝、心静かに神様に向かう時間を持っていると、段々と心が軽くなっていくのを感じました。

すると、それまで自分の力で甲子園にと考えていたことが、ひどく思い上がった考えに思えてきて、人の話に耳を傾けるようになりました。

また、それまでは自分一人で仕切っていた練習も、他の顧問と相談して任せることが出来るようになりました。部員との関わり方も、以前のような厳しさ一辺倒ではなく、会話を心がけるようになり、その結果、部内の雰囲気がとても良くなりました。

加えて、経験豊かなトレーナーと、メンタルトレーニングの技術を持つ同僚の教員が、不思議なご縁でチームに関わってくれるようになり、以前よりも、はるかに充実した練習ができるようになりました。

その成果は、平成二十三年の夏に突然現れました。春の県大会では二回戦でコールド負けをしていたのが、一試合ごとに勢いに乗り、遂に初の決勝進出を果たしたのです。

相手は春夏連続甲子園を狙う県下一の強豪校。圧倒的に不利だと言われながら、選手達は臆することなく戦い、九回を迎えて三点をリードするという見事な試合を展開しました。残念ながら最終回に追いつかれ、延長戦で敗れてしまいましたが、その後甲子園でベスト4まで進んだ強豪校を相手に、特別な選手は一人もいないわが校が示した戦いぶりは大いに注目され、翌年の春には県内最多の新入生が入部するほどの人気を集めました。

その後、私は両親が続いて亡くなったため、監督を引き、今は教会の御用に専念しています。最後と決めて臨んだ平成二十七年秋の大会では、選手達の頑張りのおかげで、県大会初優勝の喜びも味わいました。その後の中国大会で敗れ、またも甲子園には届きませんでしたが、二十三年夏も二十七年秋も、自分の力に頼った指導では、とてもあそこまで勝ち進むことはできなかったと思います。

あのまま強引な指導を続けていれば、皆の心は離れ、私の心も折れていたかもしれません。

今、振り返れば、あの毎朝の参拝は、神様が私を引き寄せられ、かたくなで狭い私の心を、柔らかく広いものに仕立て直してくださる為の時間だったとも思えるのです。

私の後任の監督も、今、毎朝、金光教本部へ参拝しているそうです。現監督は私が最初に赴任した時の部員で、長年共に甲子園を目指してきた仲間です。金光教と関わりのない家庭で育った彼が参拝を続けるのは、自分の力で出来ることなど何一つないこと、そして神様に願うことで思いもよらないおかげが頂けることを知っているからだと思います。

金光学園野球部には目標と目的があります。目標はもちろん甲子園出場。目的は、その目標に部員全員で力を合わせて取り組む中で、自分も人も共に成長し、世のお役に立つ人になることです。この目的をぶらさず、いつの日か目標も達成されることを、日々祈らせて頂いています。

《信心ライブ》

「まず命がある」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、大阪府放出（はなてん）教会長の井上智雄さんが、平成二十七年七月、金光教玉水教会でお話されたものをお聞き頂きます。

ある日、女の子が訪ねて参りました。この子は、お正月とか年に二、三回はお参りしてくるんですけれども、普段は東京で仕事をしております。それで、その子がですね、平日にもかかわらず教会に参りまして、お話を聞かせて頂きました。

この子が言うのにはですね、「先生、私、この前、おへその横からうみが出てきたんです」。こう言うのですね。すぐにこれはおかしいと思って、病院で診てもらうと、お腹の全面、全部にがんが広がっておりまして、もう、とにかくこれはどうにもならない。手の付けようもない。どうしようもない。ということでございまして、「私の病院ではもうだめだから、他に行ってくれ」というような状況になりました。

この子にしますと、もう大変なことでございますから一生懸命です。違う病院にも行ったんですけれども、他の病院に行きましてもやはり同じでございました。

「もうこれはどうにもならない。逆に今、手

を付けたらあなたの寿命を短くしますよ」というようなことでございました。泣きながらその話をしてくれました。

ただですね。この子は昔から婦人科によく行っておりまして、大学の婦人科の先生と懇意にしておりましたので、その先生に、いよいよどうしようもないと話をしたら、その先生が、「ともかく私の出来る範囲で診させてもらおうか」というような話になりました。一縷（いちる）の望みなんですけれども、一人、そういう方が出てまいりました。で、そのことが決まって教会へ参りました。

「まず、命がある。まずこのお礼をさせて頂きましょう。それと同時にそういうふうに、出来ることをして下さる先生が出てきたということ。これは一つの大きなおかげなんだと。それを忘れてはいけない。この神様は無駄事をされない。そういうことが起こってくるということは、必ずどこかに展開があるから、おかげになってくるから。まずそのことをお礼を申し上げながらいきましょう」と本当に色々と話をしながら、励ましながら、お話をさせて頂きました。

ただですね、それで東京へ帰るということなんですが、この子を一人で帰らせるわけにはいかない。どうしたらいいかと。

ともかくこの子の今住んでいる場所を聞きながら、東京でその近くにある教会がどこかないだろうかと考えておりましたら、家の近くに教会がございまして、その教会はちょうど、会社からの帰り道にも通ります。もうとにかく、東

京へ帰ったら、何かあったら教会に行って、自分に色んなことがあったら、そのまま包み隠さず、先生に話をしろ。愚痴でもいい。自分の胸の内の中のあることを全部先生にお話しすればいいから、先生が必ず聞いて下さるから、そして先生のおっしゃることを聞かせて頂こうと。そういう話をいたしました。

この子にしましても、私どもの教会にわざわざ東京から参ってくるという状況ですから、それはもう、本当に頼る所がどこにも無いという状況でしたので、東京へ帰りましても、教会にお引き寄せを頂くようになりました。

東京に帰りまして、約三カ月ぐらいですかね。抗がん剤治療がございました。もう見事に髪の毛も全部抜けて、戻しもしますし、大変な治療だったんですが、その三カ月の治療を終えました。

結果を見てみますと、お腹の全面にあったがんがですね、本当に見事に奇麗に無くなったんですね。先生もびっくりされまして、もうとにかく手の付けようがないと言っていたがん。特に、その全面にあるがんが邪魔だったんですが、それが消えたんですね。ということは次の手立てが出てきた。中にあるがん、そのがんに手を付けることが出来るという状況になりました。まぁともかく、手術をしてみましょうという形になりました。

そこから大きなおかげを頂きまして、その手術も無事に終えさせて頂きまして、だんだん本人も元気にならせて頂くおかげを頂きまして。

がんマーカーの方でも数値がだいぶ下がってまいりました。腫瘍が今無いという状況におかげを頂いております。

教会というところはですね、いよいよ考えてみますと、本当に家に起こってくる、自分の身に起こってくること一つずつ一つずつを教会にお届けする。これが大事なんですね。

いかがでしたか。

もし、お医者さんから、「手の付けようがない。どうしようもない」と言われたら、これからどうすればいいのだろうかと悲観的になり、平常心を保てる人は多くないでしょう。

でも、井上さんは、どんなに絶望の淵に立たされても、「まず、命がある、そのことを神様にお礼を申し上げ、ここからのお願いをさせて頂きましょう」とおっしゃいます。

そして、東京でお参りした教会の先生からは、「神様がお造りになった体だから、神様が治して下さる」と言ってもらいました。この言葉が彼女にとって大きな心の支えとなり、不安だった手術も無事に乗り越えることが出来、五年が経過したそうです。

今は科学が進歩し、昔に比べると医療も格段に良くなりました。けれども、医療の働きの奥には、目には見えない神様の働きがあり、医療を通して神様が治して下さるのだということを忘れてはならないと思いました。

《先生のおはなし》

「幸せはどこから」

徳島県・徳島西教会　筒井善子

おはようございます。まず私の好きな金光教の歌を聞いて下さい。

♪幸せはどこからやってくるの　そうさ　幸せはよろこびの木に咲く花なのさ
だから私の心に　よろこびの木を　大きく大きく　育てよう　木は育ち花は咲くよ♪

（『よろこびの木』作詞・柳田安代／作曲・馬渡三郎）

私は今、徳島少年少女合唱団の指導者として、子どもたちに心を込めて歌うことの大切さを伝えながら、金光教の教師として教会で奉仕をしています。

先ほど歌わせて頂いたのは、「よろこびの木」という私の大好きな金光教の歌です。

歌詞の中に、「幸せはよろこびの木に咲く花」、そして、「よろこびは感謝の枝に結ぶ実」とあります。この歌を歌っていると、有り難くうれしい気持ちで満たされます。そして、私の心の中にも喜びの木を大きく育てて、幸せの花をいっぱい咲かせたい。感謝の心を大きく育てて、喜びの実をいっぱいつけたい。そんな気持ちになります。

また、歌だけではなく、金光教の言葉の中にも、私が大好きな、このような言葉があります。

「有り難い有り難いとばかり思う人には、有

り難いことばかりできてきます」という言葉です。

私は、この「有り難い」という言葉のところに「うれしい」や「おいしい」など色々な言葉を当てはめます。そうやって、先ほどの歌のように、いつも喜びと感謝の心を大きく育てたいと願い続けています。

それでも日々の生活の中では思い掛けないことが起こってきます。どんなに頑張っても、努力をしても、祈っても、すぐにはどうにもならないことが起こってくる。そんな時、祖父が教えてくれた言葉が私を導いてくれます。

私が一歳二カ月の時、父は亡くなりました。金光教の教師であった祖父が父親代わりになって私を育ててくれました。祖父は大変厳しい人でしたが、思いやりが深く、いつもお参りに来られた信者さんやご近所の方に金光教の教えを話し、孫の私にも幼い頃からいろんな話をしてくれました。

その中に今でも私の心に残り、支えてくれていることがあります。祖父は毎日、幼い私が保育園から帰ってくるのを玄関で待ち構えていて、「善子、鉛筆と紙を持ってこい」と言います。祖父に鉛筆と紙を渡しますと、そこに漢字で「有難う」と書き、「これは、難が有る、難しいことが有ると書いて、ありがとうと読むんじゃ。難があってありがたい。もし、善子が、『困ったな～、嫌じゃな～』と思うことがあった時、まず、『ありがとうございます』と言って、その後にお願いしたら良い。そうすれば、

必ず神様が一番良いようにして下さるからな」と、私が小学校に上がるまで、毎日毎日、言い聞かせてくれました。

この言葉は、私の日常のあらゆる出来事の中で、困ったこと、嫌なこと全てをプラスの方向に導いてくれています。

一人っ子でちょっぴり寂しがり屋の私は、いつも歌を歌っていました。厳格な祖父母とお嫁にきた母、そして私の四人で囲む食卓はとても質素で静かでしたが、夕食が終わると、祖父がいつも、「善子、歌ってくれ」と言います。私が歌を歌うと、母も、祖父も祖母も笑顔で聞いてくれます。それがとてもうれしくて、もっと歌うことが好きになっていきました。

そんな私に神様は音楽の道を歩ませて下さり、徳島少年少女合唱団の指導者として、たくさんの子どもたちと関わるようになりました。

合唱団では、小学生から高校生までの団員たちと共に国内公演だけでなく、広く海外でも演奏の機会を頂いています。団員たちとの合言葉は、合唱団スマイルです。ほほ笑み掛けて心を込めて歌い掛ける。団員たちは歌える喜びに感謝して、聞いて下さる方も幸せな気持ちになって頂きたいと練習に励んでいます。

でも時折、人間関係や進路のことなどで落ち込む団員がいます。そんな時、私は祖父の言葉を思い出し、「難があって有り難いんだよ。プレッシャーやスランプがあるから努力をすることが出来るし、もっと成長することが出来るよ」と伝え、団員たちの心に寄り添い、共に歩んで

います。

木の葉が色付き始めた秋晴れの午後、合唱団を卒団した子からメールが入りました。

「今、就職活動という形で初めての大きな挫折感を抱いていますが、先生が教えてくれた『難があって有り難い』を胸に、まだまだ全力で駆け抜けます」と、そこには書いてありました。

祖父の言葉が私を通して彼女に伝わり、心の中で喜びの木が育ち、幸せの花が咲いて、感謝の枝に実が結びますように。そして皆様の心の中にも。

《信心ライブ》

「人を軽く見ないこと」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、茨城県にある金光教結城教会長の大木光雄さんが、一昨年の一月、金光教本部でお話しされたものをお聞き頂きます。

教祖様はご晩年に、「私にも欲がある」とおっしゃられて、「世界の人々を助けたい欲がある」という教えをなされたわけであります。で、この事柄を、私がもう一度、「世界の人を助けたい」と願って下さった教祖様のその思いを頂き直すというのがご用の在り方の中の大切な部分であると考えております。

今、私たちは、同じ時代を生きているわけですけれども、近代化とかグローバル化とか、いろんな難しいことがたくさん出てまいりまして、様々な仕組みの中で動いている時代です。東京へ通わせて頂いておりますと、生きづらさを抱え、難儀に苦しんでいる人たちとたくさん出会うわけです。そういう人たちが少しでも、金光大神様の、このお道のご信心に触れて、神様や御霊（みたま）様と共に、「ありがたいなあ」と言える生活を進めさせて頂ける、少しでもそのご用に、神心になってお仕えさせて頂ければと願っております。

しかしながら、先ほど申し上げたように、そ

いう建前と言いますか、願いは立てておるんですけれども、なかなか実際の私の生活と言いますと、神心になれない人間の弱さと、そして難儀さ、自分の難儀さに毎日毎日向き合いながら、「どうすれば本当に神様のお心にかなうのか」ということに取り組んでおります。

東京センターへ通わせて頂くのに新幹線を使わせて頂くんですが、教会から二時間掛かりまして、毎日教会を七時五十分に出ているんですけれど、ある時こんなことがありました。

私が乗る東北新幹線は通勤の東北新幹線で、ほとんどがお勤めに行く方が並んで乗ります。新幹線の乗り口に並んで待っていますと、土曜日だったんですが、休日ですから他のサラリーマンの方はおりませんでしたけれども、乗り口に並んでおりましたら違うところに若いカップルが、土曜日ですから東京へ遊びに行くんでしょうね、並んでおりました。私は、「今度の電車の乗り口はここだ」というのは分かっておりますので、「そこはちょっと違いますよ」と。

「今度の電車は、この緑色の入り口のところです」と声を掛けたんです。で、私は何も期待して声を掛けたわけじゃあないんですが、普通だったら、「ありがとうございました」というのが返ってくるのかなと思っておりましたら、何も言わずにそのカップルが私の後ろを通ってもっと前の方の電車に行かれた。

その時にその女性が、「あのおじさん、なんで私に声を掛けたのか分かる？ 私が可愛いからよ」と言うんです。別に可愛くないというこ

とではないんですが、やっぱりこの、人間関係と言いますか、ちょっと、「ありがとうございました」とか、声を掛けずともちょっと会釈するとか、そういう最低限のマナーみたいなものが、どうも失われつつある。

私は今年六十二歳になるんですが、東京に通わせて頂く中で一番つらいのが、そういう人に出会うというか、その人の言動を目の当たりにした時の自分の心の動きに、非常に信心の神心を作っていくということの大切さを改めて感じさせて頂くのであります。

「腹を立ててはいかん」と、もう少し心を広く持ってですね、そういう方がいても、「金光様、どうぞ」と、相手の方が、人として、氏子として良い生き方が出来ますようにというふうに祈らせて頂きたいとは思うんですけれども。

山手線なんかに乗っておりまして、出入口でもたれ掛かって、荷物を置いてですね、どんと下へ置いてスマートフォンにずっと興じているような、そういう姿を見ますと、「一体何なんだろう、神様は皆、神の氏子、どんな人間でも神の氏子で、助けたいと願って下さっている。しかし、信心させて頂いている私がその方たちにどういう触れ方、どういう祈り方、どういう導き方をさせて頂ければいいのかと、常に悩みながら物事を進めているわけであります。

いかがでしたか。モラルの乱れが問題視されている今の時代ですが、大木さんは、そのような場面に接した時、ご自身の心の在り方を問題

にされています。一方で私はと言うと、ただ腹を立てるだけ、相手を非難しているだけ、のことが多いなあと思いました。

例えば、スマートフォンの画面を見ながら自転車に乗っている人を見た時。「危ないことが分からないのかなあ。この人、バカなんじゃないの」。そんなふうに思ってしまうんです。

金光教には、「人間を軽く見たらおかげはない」という教えがあるのですが、悲しいかな私は、知らず知らずのうちに人間を軽く見て、いつもおかげを受け損なっているのです。

そもそも、人が助かるように願うことが信心の根幹です。

神様、これからは、スマホを見ながら自転車に乗っている人を見掛けても、その人を非難するのではなく、こう願わせて下さい。

「どうか一刻も早く危険なことだと気付きますように」「どうぞ事故など起こしませんように」

《先生のおはなし》

「何事もまずお礼」

静岡県・袋井教会　大場美子

昭和四十六年の夏、当時六十四歳の父は、金光教本部での会議の帰りに金光駅で意識不明になり、入院しました。

糖尿病で、お医者さんから、「血糖値は五百で危篤になりますが、あなたのお父さんは八百七十もあります。さらに八つの合併症。命があることが不思議です」と説明がありました。私はちょうど研修会で本部に滞在しており、父が入院したという知らせを受けました。

金光教では、信仰上の中心的な指導者を金光様と申します。私は当時二十一歳でしたが、金光様には、子どもからお年寄りまで、いつでも誰でもお会いすることが出来、親しく願いを聞いて下さり、教えて下さいます。

病院に行く前に、金光様の元にお参りしました。状況が分からないままだったので、まず私が本部で滞在中だったことを御礼申し上げました。金光様は、「金光駅で倒れたことが、すでにおかげをこうむられたのじゃ。もし乗車していたらどうなったか分からん。お礼を先に立ててなあ。何事もここからじゃ」と教えて下さいました。

病状は深刻で、度重なる危篤状態に毎日参拝し、金光様にその時々の病状をお伝えし、お祈りして頂き、危ないところを越えさせて頂きました。

三度目の危篤状態の時には、金光様から、「危篤危篤と言うが、命があるんじゃから危篤と言えるんじゃろう。命が無かったら危篤とは言えんのじゃからなぁ。命があることをお礼申してなぁ」。そう諭して頂きました。お願いが先に立ち、心からのお礼が言えない私に、金光様は時に厳しく、時に優しく教えて下さいました。

そんな中、看病しているはずの私たちが、父に力付けられ、励まされることも度々ありました。声にならない声で祈りを込める父の姿に、私たち家族は共に祈り、神様に御礼申し上げました。

私たち家族は、お医者さんを通して神様の治療を受けるという思いで、何事もお医者さんにお任せすると心に決めておりましたが、ある時主治医からインスリンを投与することの承諾を求められました。当時インスリンはまだ試験中で、場合によっては脳の組織を壊し、廃人になる恐れもある、と説明を受けましたので、金光様にどうすれば良いかお尋ねしました。

金光様は、「例えば、向こう岸へ渡るには船に乗らなければならない。どんなに高い波があっても、きつい風があっても、向こう岸に渡ろうと思えば船に乗らなければならないだろうが。心配して取り越し苦労をしても、向こう岸に渡ることは出来ない。やはり向こう岸に渡ろうとすれば、船に乗らなければならない。だから船に乗った上で、波の障りがないように、風の障りがないように願わせて頂くことが大事じゃ」とおっしゃいました。それで安心してイン

スリンの投与をさせて頂くことが出来、次第に回復に向かいました。

金光教では、神様のことを「親神様」と呼んでいます。また、親神様をお祭りし、お礼お願いをし、お祈りをする場所を「広前」と言います。本部広前には金光様が一年三百六十五日毎日いらっしゃいます。

ある時、父がふと、「本部広前に参拝は出来んじゃろうか」と言いました。昏睡状態だった父の意識が戻ってきて、本部広前や金光様のことが分かっているのがうれしくて、金光様にその旨を申し上げました。

金光様は、「そうか、意識が戻ってきたんじゃなぁ。お広前まで参って来んでも、点滴を打っているベッドの上も、世界中が広前じゃろうが」と、いつもの温かい笑顔で、「一歩、一歩なぁ」とおっしゃり、「ありがとうございます」と親神様にお礼を申し上げて下さいました。さっそく病院に戻り、父に金光様のお言葉を伝えました。

「あれだけの危篤状態、糖尿病との合併症だと、脳に障害が残ることもある」とお医者さんも仰っていましたが、父は親神様のお働きを頂き、正常であることが分かりました。金光様はそのことを、「ありがたいことじゃなぁ」と仰ってお祈りして下さり、私はその時初めて心の底からお礼を申し上げることが出来ました。

金光様は、「何事もまず『親神様のおかげを頂いている』ということを思いなさい。一日一日大切に親神様に心を向けさせて頂くんじゃ」

と教えて下さいました。父の病気回復を願うばかりになっていた私自身が、実は親神様の大きなお働きの中でここにいること、お礼の足りない私に代わって金光様が親神様にお礼を申し上げて下さっていたことに気付かせて頂きました。

父は四カ月間の入院を経て、退院することが出来ました。金光様に退院のお礼を申し上げ、家族やみんなと共に、大きな喜びの中、教会に帰って来ました。教会では、信者の皆さんが教会長である父の帰りを待ちわびていて、門の内外に立って迎えて下さり、大変ありがたいことでした。

金光様は私が困らないように、迷わないように信心を教えて下さいました。「お礼を申し上げることを先に立てた信心、どんなことも喜びとする信心、全て親神様のお働きの中での出来事じゃからなぁ」と、その時その時に、大切なことをいろいろと教えて頂き、親神様にお願いし、御礼申し上げて下さいました。

この生涯忘れることの出来ないお導きを頂き、私の中にその喜びが染み込んでいき、一人でも多くの人たちと手をつなぎ、願い合い、喜び合える御用にお使い頂きたいと願っています。

《信心ライブ》

「たった一言『おはようございます』」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、大分県にある安岐教会の教師・長木重子さんが、平成二十三年三月に、大阪で開かれた集会でお話されたものをお聞き頂きます。

ある日、教会に一人の女性がお参りされたそうです。若くして大家族の長男に嫁いだ女性です。忙しい仕事と家事に追われて、お礼の言葉はおろか、あいさつも交わさない日々の中で、彼女は人知れず悩んでいたというのです。

「私は、今日まで主人に支えられてきたけれども、主人にお礼をしたことがない、言うたことがない」。皆さん、いかがですか。奥さんやご主人に、毎日お礼が出来ておられますかね？

この方は、まず教会にお参りしてきて、その時、五十五を過ぎておられました。「ほんとに恥ずかしいことですけれども、先生、こういうお願いをしてよろしいでしょうか」と言われた。「何ですか？」。「私は、主人に『おはようございます』『ありがとう』『おやすみなさい』を言うたことがない。今日から主人に『おはようございます』と言いたいんです。今までゆっくり話す時間もなかった。今は二人暮らしですので、ゆっくり話す時間はいっぱいある。まず

主人に『おはようございます』から始めたい。どうぞ心から主人にそういう言葉が言える私にならせて下さい」。

えっ、この人、五十五も過ぎとるのにと、ふっと思ったですね。ところが、そう思いながら、「あっ、この人にとっては大事なことだったんだ」と。その人の願いを受け止めさせて頂いて、「そうだなあ。今日から一緒に願わせて頂いて、稽古させてもらおうな」と言うて、帰られました。

ところがですね、なかなか何十年という間、一緒に生活して、言ってないと、いつ言おうか、いつ言おうかって主人に付いて回って、いつ言おうか、いつ言おうかとする。

すると主人が、「な～ん、おまえ、ゴソゴソゴソゴソ横付いて回るのか」とか言われる。朝、布団を上げる時に、そばに黙って立っとる。「何か用があんのか？」と主人が言うけど、出ないんだそうですよ、本当に出ない。

今日は言わして頂かなと思って、「今だ！」と思って、主人が布団を上げる時に、「お父さん、おはようございます」と言った。そしたら主人が、「うん」って言った。もうその一言。「おはようございます」と言えた自分に対して、うれしくてうれしくて、その場に座り込んで泣きました。この人にとってはね、本当にうれしかったんだと思います。

十九歳で嫁いで、主人の弟や妹たちのお弁当を作って、学校に出す。お舅（しゅうと）さんたちからは、「ああせいこうせい」と言われて、夜、最後に

お風呂に入る時は、五右衛門風呂に立ってひざぐらいまでしかお湯が無かった。それでも黙って入ってた。

そういう時に、主人が、「今日も、やおなかったのう」とこう言ってくれよったんだそうですよ。涙が出ていた。そういう支えてくれた主人に、結婚してそれこそ何十年やないですか。やっと、「おはようございます」と言えた。

もう足が砕けてね、しゃがみ込んで泣いた。で、はっていって、家にお祭りしてあるご神前で泣きながら、「ありがとうございます、やっと主人にあいさつが出来ました」と言うてお礼を申したんだそうです。

すぐ教会に電話を掛けてくれて、「先生、おはようございますと言えた」。もう泣きながら言われました。その時、私は思った。たった一言、「おはようございます」が言えた。こんなにこの人はうれしいのかなと思いましたね。

私たちは、毎日、「お父さん、おはよう」「おやすみ」って言ってますよ。どれだけのお礼が神様に申せているのか。当たり前にしゃべっているなと思いました。それから、あっ今日も朝から主人の顔を見ることが出来た。「お父さん、おはよう」。こう言える。今日、「お父さん、お休み、お疲れさん」と言える。

そこからすごいものが生まれるんですね。この人が、「おはようございます、お父さん」と心から言えるようになった。そしたらご主人が、「あ、おはよう」と返ってくるようになった。

その人はお勤めに行っておられましたので、

お弁当を作って、「はい、お父さん、行ってらっしゃい」と言えるようになったと。ご主人が、「はい、行って来るぞ」とおっしゃった。「おはよう」から相手の言葉も返るようになった。

それで、ある日、お弁当を持って帰ったご主人が、「ただいま。今日の弁当はうまかったぞ」と言ってくれた。ほんでお弁当を抱え込んでまた泣いたと。うれしくて。たったねえ、「おはようございます」「ありがとう」「うまかったぞ」でしょ。その中に、どれだけの神様の思いが含まれているかなあと思いましたね。

夫が妻に掛けた言葉、「今日も、やおなかったのう」。これは大分県の方言で、「簡単にはいかんかったなあ」「大変だったなあ」という意味だそうです。そう労り続けてくれた夫に、「おはようございます」のたった一言。その一言が言いたくて、神様にお願いをしていく。

家族の間では、ついつい何も言わなくても分かってくれるだろうと思いがちですが、実際には伝わっていなくて、もめてしまうこともあります。神様に願っての「おはようございます」の一言が、夫の「今日の弁当はうまかったぞ」という感謝の言葉につながっていく。

家族や身近な人にお礼やあいさつを言葉にすると、その言葉を通して神様が働いて下さることを教えられました。

身近な人に心を込めて、「おはようございます」。

おはよう
こんにちは
こんばんは
おやすみ

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ４時３０分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ５時２５分
朝　日　放　送	水曜日	あさ４時５０分
ＲＫＢ毎日放送	日曜日	あさ６時５０分

こころで聴くおはなし　検索